

# 播磨ヒストリア

播磨町の歴史をひも解き、その時代にタイムスリップして、当時の出来事をエピソードを交えながら紹介します。

播磨町郷土資料館 館長補佐 宮柳 靖  
☎079(435)5000



▲海外新聞

## エピソード 四

### 「新聞」誕生秘話②—新聞は3人の手によってつくられた

日本で初めて新聞が発刊されたのは、今から約150年前の1864(元治元)年6月28日(旧暦5月25日)のことです。

彦は、1862(文久2)年、アメリカ領事館通訳として横浜に帰ってきます。日本でよく新聞のことを聞かれた彦は、領事館を一年で辞めて商社を設立し、取り引きを通じて新聞を広げていこうと考えます。当時は、鎖国から開国へと向かう激動期で、京都や大阪では新撰組が取り締まりを強化し、横浜では外国人が迫害を受けるなど、新聞の発行は身を危険にさらす行為でした。このような中で、彦は新聞づくりの協力者を探します。英語と日本語が話せた彦ですが、寺子屋しか通っていませんでした。日本語で文章をうまく書けなかったのです。

協力者の一人は、出入り商人の紹介で英語の勉強をしていた本間潜蔵(本名は清雄)でした。もう一人は、かねてから親交のあったヘボン博士のもとで助手として働いていた岸田吟香(幼名は辰太郎)でした。吟香は、アメリカの事情を聞きたくてよく彦の家を訪れ、英語も学んでいました。

新聞は、彦が外国の新聞を翻訳し、吟香と潜蔵がひらがな交じりのやさしい日本語に直したものでした。『海外新聞』で知られる新聞は、初め「新聞誌」の名で発刊され、4~5枚の原稿を半紙一枚一枚に筆で書き写していました。100部前後筆写したものを毎月3~4回発行し、横浜市内に配っていました。しかし、当時は、新聞に興味はあっても、買ってまで読むというのではなく、また幕府の監視を恐れてか、定期購読者はわずか2人でした。そのため、残りは無料で配布していました。経営が苦しくなったのかしだいに紙面が減り、半紙2枚のときもありました。

しかし、外国の事情を正しく伝えたいという思いは強く、翌年5月には、「海外新聞」と改題し、木版刷りで発行しています。さらに、第18号からは広告を掲載するなど、開拓精神に満ちた新聞づくりは、現在の新聞の土台を築いたといえるでしょう。2年間続けた新聞は、吟香が日本語辞書を活字印刷するために上海へ行ったこともあり、やむなく26号で廃刊しています。

明治維新まであと4年のことでした。